広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	子どもの作文に見る鐘の音のイマジネーション
Author(s)	武村，昌於
Citation	児童の言語生態研究 , 19 : 15 - 29
Issue Date	2018-10-27
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046619
Right	
Relation	

特集

子どもの作文に見る鐘の音のイマジネーション

武村昌於

1. はじめに

「ゴーン、ゴーン、ゴーン……」

まぎれもない鐘の音。でも、この音を僕はお寺で聞いたことはない。でも、これだけなら知っている。低く、大きく、そして心にひびくような堂々としている音。そして何よりも僕が思うことは、お寺の鐘の音は、だれかが「大きくてうるさい音だ。」と言っても、なんだかしんみりとした音だと言うこと。鐘の音は、思い出せば出すほど、

「じーん」

と、心にしみてくる音。

これは教室で何回か鐘の音をテープで聞かせた後、「鐘の音を聞いて」という題で書かせた三年生男子の作文である。この男子は、テレビ等で間接的に鐘の音を聞いたことがあるかもしれないが、実際にお寺では聞いたことがないにも拘わらず、この男子の裡では、イマジネーションを発動して、自分だけの鐘の音を聞いているのである。しかも、それが堂々として低く大きく心に響きながらも、しんみりとして、「じーん」と心にしみてくる、というのである。

他にも、五年生女子の作文の事例では、除夜の鐘を聞いたことがないその子が、祖父の十三回忌でお寺の鐘の音を聞く機会があった。

「『ボーン』と低い音。

その音がジーンと心にきた。私にはとてもあたたかい音に感じた。なんとなく、なつかしい、やさしい音に感じられた。鐘にまほうがかけられているように、すごい力だ。」

と書いている。

この作文のように、ほとんどの子どもは、鐘の音を単なる「打音」「雑音」「噪音」として聞くのでなく、そこから生起する感覚や感性と相まって感情が揺り動かされ、それが言葉となって表出してくるのである。ところで、「ゴーン」などと言う言葉は、我々日本人にとっては当然のこととする認識があるが、はたしてそうなのであろうか。むしろここにこそ、日本人としての根元的で潜在的なイマジネーションが働いていると言えるのではなかろうか。

2. 鐘の音の余韻と心地よさ

富山県高岡市の鋳物の街で、梵鐘を製作している元井秀治氏（鋳物メーカー社長）は、NHKのラジオ番組【にっぽんの音】で、

「昔から『良い鐘は一里鳴って、一里響いて、一里渡る』と言われている。釣鐘は音圧が100dB前後、50～160Hzの周波数で、2km位しか音は飛ばない。『渡る』は気配だけが伝わって行く、日本人しかわからない感性だと思うが、渡る気配が12km先まで判ったということで、良い鐘は三里と言われる所以と思う。」

と述べている。「日本人にしかわからない感性」かどうかは別にして、この「渡る」という感性は、例えば日本画における「余白」と通じるものと考えられる。つまり、「余白」に時間や空間の奥行や余韻を感じさせる技法と同じ感性の働きと言えると思う。また、同じく岐阜市で梵鐘を製作している、株式会社岡本が発行している「梵鐘の歴史と音色について」では、次のように書かれている。

「鐘の音について昔から『アタリ』『オシ』『オクリ』と三つの部分に分けられている。撞木が鐘を打撃した直後の音で、ふつう打音と呼ばれ、耳ざわりがなく、グォーンという荘重な響きをもった1秒以内で消えるのが『アタリ』である。これに続いて約10秒ぐらい続く高い感じの音で、比較的遠方まで届き、離れた所で聞く音が『オシ』で遠音とも呼ばれている。これに続いて30秒から1分ぐらい余韻が強弱（うなり）を伴ってだんだん減衰していく、これが『オクリ』である。このうなりの周期は1秒に1回から1／3回ぐらいが適当とされ、うなりが明確に聞こえるのがよいとされ、この『アタリ』『オシ』『オクリ』と3調子そろったのがよい鐘の音とも言われている。」

更に、京都永観堂の結城浩徳氏は、「永観堂の梵鐘」の中で、「『オクリ』の後、一秒程度の『うなり』が明瞭に聞こえる鐘がよいといわれ、『うなり』は周波数のわずかに異なる二つの波が干渉して生ずるものである。」と述べている。

本稿は、子どもたちの作文の中に以上のような鐘の音の分類がどう意識付けられているかを見ることではなく、子どもたちの作文の中に、つき鐘の音の中にアタリの音だけでなく、余韻としての「唸り」が意識せられ、更にまた、そこに体感と共に、どのような感情が生起し、全体としてどのようにイマジネーションが発動していくのかを見てみたいのである。ただし、冒頭の元井氏の言われる「渡り」を感じさせる作文は、残念ながら見受けられなかった。もしも、これを表した作文が今後現れれば、それこそ、日本人としての無意識の感性を見て取ることができると言えよう。

鐘の音の分類は今は置いておくとして、現代ではコンピュータの進歩によって、音そのものの分析や音響面の効果、サウンドスケープといった音環境の研究に至るまで、「鐘の音」に関する科学的な分析や研究が盛んに行われている。

サウンドスケープ研究の田中直子氏は、「西洋ではひとつひとつの音には純粋な響きを追い求め、それらを複合させて構造化することによって複雑性を生み出すのに対し、日本ではむしろ、一音そのもののなかに複雑性を見出す点に特徴がある。その複雑性は、西欧の伝統的な審美眼からすると『雑音』『噪（そう）音（楽音でない音）』とくくられてしまう。しかし、それ故に、日本の音は自然の音につながり、寄り添おうとする。その自然音には、人間には聞こえない高さの超音波が多く含まれており、そのことによってリラックス時に発生するα波が顕著になって『心地よさ』が増幅されて感じられることが工学的にも実証されている。」としている。

こういった超音波による心地よさだけではなく、梵鐘が盛んに鋳造された江戸期以降では、より長い余韻と重低音の鐘の音が好まれる傾向にあったことが、より心地よさを増幅させることにつながっているという指摘がある。このような、余韻や重低音を好む感性は、元々日本人が深層心理として抱いていたものが、鐘の音を好むことにつながり、それが現代の子どもたちにも潜在的な意識として受けつながれているのではないか、ということを本稿の主題としたいのである。

3．鐘の音と「あの世」との関わり

更に田中氏は水琴窟の例を挙げて、「ここで重要なのは、日本の音が自然音と一体化するということだけではなく、自然音に聴き

入り、それらが象徴する『彼方』の世界を『きく』きっかけとなっているということである。」「まさに日本の音は『きく』ことを深め、きく者と音の向こう側に広がる『彼方』の世界を介在するメディアとしてはたらいていると考えられる。」としている。

また、『中世の音・近世の音―鐘の音の結ぶ世界―』（名著出版　１９９０年）で、著者の笹本正治氏は、「今の私たちにとっては、鐘の音を日常に意識することはほとんどない。しかし、私たちは鐘の音を完全に忘れたわけではない。（略）私たちの鐘に対する意識の中には、時代とともに失われていきつつあるものと、古くからの感性がそのまま伝わっているものとがあるように思う。（略）本書では鐘の音を取り上げて、時代の変化の中で、日本人はどのように鐘の音に対する意識を変えていったのかを考察してみたい。」として、鐘の音と「あの世」との関係を示す伝説や説話を具体的に記している。とりわけ、第三章では、「他界から来た鐘」として、「水中・龍宮から来た鐘」「地獄に落ちた者を救う鐘の音」「あの世とこの世を繋ぐ音」と小項目を立てて記している。また、「（神々や妖怪、魔物、精霊の支配する）『夜』は、人間の住むこの世における時間的なあの世（異界）だったのである。（略）夜の時間と昼の時間を区別できるものとして、中世には特殊な能力を持つ鋳物師が作成し、あの世とこの世を繋ぎうる器具でもあった梵鐘が存在したものと私は考える。」とし、更に、「この鐘の音は本来人間だけに聞こえればよいというようなものではなく、あの世の住人たちにも聞かれることを意識して鳴らされていたのではなかろうか。あの世の住人とこの世の住人とが交錯する、薄暗い黄昏時という時間帯に鳴らされるところに、『ゆうやけこやけ』の鐘の特徴があるのである。（略）妖怪たちが出没する黄昏時は子供たちにとって危険極まりない時刻であった。だからこそ山のお寺の鐘が鳴ったら、子供たちはお手々つないで、みな帰らなければならなかったのである。」としている。

日本での梵鐘の鋳造は、寺院と密接な関わりがあり、梵鐘そのものの各部の名称は仏教の教えに由来している。それらによって、各地に梵鐘や鐘の音にまつわる伝説や説話が生まれ、その中には、梵鐘がこの世とあの世をつなぐ橋渡しをしたり、鐘の音が地獄から救い出す力を持っていたりする話なども伝わっている。

しかし、我々大人でもそうだが、現代の人間にとって、梵鐘や鐘の音があの世と関わるということを意識することはほとんどない。これは、子どもたちにとっても同じことが言えるのではないか、と思っていたが、子どもたちの作文を丁寧に検証してみると、そうとも言えないと思える事例があったのである。二つの事例を挙げてみることにする。

三年　男子　鐘の音を聞いていると

とおいとおいむかしの日、ある人が大きな道を歩いていると、だれもきづいていない小さくてほそいトンネルがありました。その人はそのトンネルのところに行ってみました。その人はそのトンネルの中に入りました。その中はまっくらです。しばらく歩いていくとお寺がありました。外はまっくらです。お寺はだれもいないように見えました。なぜか鐘がひとりでになりました。その人はその鐘の音を聞いてふしぎそうなかおをしました。その鐘の音はきえました。その人はトンネルから出ると外はあかるいのです。さっきのばしょはどこだったのでしょうか。

この男子は、テープから流れてくる鐘の音を聞きながら、イマジネーションの赴くところをお話としてまとめている。「トンネル」はあの世への入り口あるいは出口であり、しかもトンネルの中は「まっくら」なのに、出た途端に「あかるく」なる。何やら古事記で、根の堅須国からこの世に戻ったイザナギノミコトの「よみがえり」と重なりあう。しかも、このよみがえりの契機となったのは、

「鐘の音」であった。更にもう一例を挙げる。

三年　女子　　鐘

　木曜日になるといつも、習字にいきます。習字の場所は、仙川の緑ケ丘幼稚園です。習字をやっていると、鐘が聞こえます。時計を見ると、8時になっていました。習字をやって1年たっていました。

　初めて習字に行ってやっているときには、鐘が鳴っているのに、気が付きませんでした。初めて習字を習ってから、2週間ぐらいたってから、鐘が6時になっていると気がつきました。

　その鐘をきいていると、小さいころに、プールに入っていて、おぼれていきができなくなってしにそうになって、お父さんがきて、たすけてもらったことを思い出してしまいます。

　この女子は、プールで溺れて死にそうになったことと父親に助けられたこととが、鐘の音をきっかけにして思い出されてくるのである。この事例もあの世からの「よみがえり」のイマジネーションと言えるのではなかろうか。習字を習っている時に聞いた鐘の音とプールで溺れかけ、死にそうになって助けられたこととは、本来同時性があるわけではないのに、鐘の音を契機としてイマジネーションが発動し、あの世と繋がった好例と言えよう。

4．鐘の音と「言葉」

　『日本の耳』（岩波新書）の著者　小倉　朗氏によると、

「実際、『不思議なことに……』というより他ない結果だが、それはともかく、いわば外国の耳は、虫の音を、ちょうどカチカチという時計の音のように聞き、日本の耳は、言葉と同様、それに人間的な感情を移入して聞く耳ということになるだろう。（略）

　日本の耳から言えば、ヨーロッパの耳は、母音を『言葉』としてよりむしろ『音』として捉えているというわけである。（略）

　日本の耳は、邦楽器の音も『言語脳』に取り込むという事実が確かめられている。そしてこれは、『9歳の子供で、邦楽器音に日常全く馴染んでいない場合でも』そうだった。（略）

　日本の耳は、単一な鐘の音を聞いて、その余韻を追い、閑寂な趣に出会っていった。しかし、ヨーロッパの耳は、異なったいくつもの鐘の音を必要とした。当然、そのような耳は、異なる音の配列や配合の工夫を楽しむ性質を示す。したがって、日本の耳は、ある条件が整えば、響きそのものに充足し、一方、ヨーロッパの耳は、ちょうど建築家における石や木、鉄、ガラスのような対象として音を捉える性質があるということを物語っている。

　したがって、日本の脳は、既に見たように『あらゆる人の声、虫の音、鳥や獣の鳴き声』を、母音と同様、言語脳に取り込み、外国の脳は、それら一切の音を、母音と同様音楽脳に取り込んでいる。」

と述べている。

　我々日本人は、ヨーロッパの鐘の音は、「カラーン、カラーン」「ジャラーン、ジャラーン」等と表現し、その地の人もそのようにその鐘の音を発音すると思っている。しかし、ある旅番組を見ていると、鐘の音を実際に物を机に打ち付ける動作によって表し、言葉として表現してはいなかった。司会者が「これは文化の違いなんだろうね。」と言っていたが、このことから、我々日本人が梵鐘の音を「ゴーン」とか「ボーン」とか表現していること自体が、日本人の音感覚や体感と関わっているに違いない、と考えられる。更にそれは、子どもたちの裡にもイマジネーションの潜在意識として受け継がれていると思われてならない。

5．作文に見る鐘の音の表現

二年　女子　かねの音を聞いていると…

　よくおてらに行くと、ゴーンゴーンと、ながくなりひびきます。かねの音をきいていると、ちかくできくと、とても大きい音

ですが、とおくできくと、なりひびいています。そのおとをきいていると、わたしは心がおちつきます。またねむくなる人もいると、おもいます。少しはいるとおもいますが、ぎゃくにたのしくなる人もいるんじゃないかと、おもいます。じんじゃやお寺はおぼうさんがいます。

この女子は、「長く鳴り響く」鐘の音は、心を落ち着かせ、眠気を誘い、楽しくもなるという。次に、

三年　女子　鐘の音を聞いていると

『ゴオオオオンゴオオオオオオン』

と、鐘の音が聞こえる。鐘の音はいつまでもひびいている。終わったとしてもあの音を忘れないように耳の中でひびいている。まるで鐘がしゃべっているようだ

『ぼくのことを忘れないで、ぼくのことを忘れないで』

と、なんだかその声は悲しそうだと私は想ぞうして思った。

この女子は、響いている鐘の音を、なんとか言葉で表そうと、「ゴオオオオオンゴオオオオオオン」と表現している。実際の作文では、「オ」の音は、徐々に小さい字で書き表している。「オクリ」や「唸り」をかなり意識している好例と言える。

三年　男子　鐘の音を聞いていると

鐘の音を聞いているときれいな音です。

『ボーンボーン』と聞こえます。

頭に音がひびきます。大きな音なので、いろんな場所にひびきます。音は、いろんな音に聞こえます。『ゴーンゴーン』とも聞こえます。音は、たまに聞こえます。

鐘の音、いちどだけ聞いてみたいです。

この男子は、テープから聞こえる鐘の音を「ボーンボーン」とも「ゴーンゴーン」とも聞こえると書いている。本来、梵鐘の音は、様々な音が組み合わさっていることからすると、かなり「正確に」言葉として表しているのではなかろうか。それにしても、「実際に鐘の音を聞いてみたい」ぐらいイマジネーションが掻きたてられてしまったのは、そのイマジネーションによって感覚や感性が呼び起こされ、「心地よさ」が助長されたからに違いない。

四年　女子　除夜の鐘

ボーーーン……。ボーーーン……。三十一日の夜ひびく鐘の音。ボーーーン……。ゴーーーン……。ゴーーーン……。ゴーーーーン……。一年の終わりを告げる除夜の鐘の音。ボーーーン。ボーーーン。ゴーーーン。ゴーン。太陽がのぼってきたら一年の始まり。お正月。ゴーーーン……。ボーーーン……。三十一日のこの時をまって、今思いきり音を響かせる。ゴーン‥。ボーーーン……。三十一日夜に響く除夜の鐘の音。ボーーーン……。もうすぐ日がのぼる。

この女子の聞いた除夜の鐘の音も、二種類の音の組み合わせであるが、ゴーンやボーンの後ろに「……」を付けて、鳴り終わりの余韻を強調しようとしている。

6．鐘の音を言葉や文でどう表しているか

次に、作文そのものではなく、作文の中で鐘の音が言葉や文としてどう表されているか見てみたい。〈（　）の数字は用例数。（　）の無いものはすべて1である。〉

二年生では、

○「ゴーン」と表したもの

・「ゴーン」(2)

・「ゴーンゴーン」

・「ゴーンゴーンゴーン」

○途中に読点を入れて鐘をつく間隔を表したもの

・「ゴーン、ゴーン」

・「ゴーン、ゴーン、ゴーン」

・「ゴンゴン、ゴーンゴーン」

鐘をつき終わった後の余韻を表したもの

・「ゴーン……ゴーン……」

○「ゴーン」ではなく、「ボーン」で表したもの
・鳴り始めが、「ボーンボン、ボーンボーン」。そして鳴り終わりが「ボーンボン」
　この子は続けて、「ボーンボ……ンボンボ……ン」となり、最後の鐘の音は、「ボーンボンボーーンボーンボンボーンボーーーーーーン」で終わっている。

三年生では、
・「ゴーン」(5)
・「ゴーンゴーン」(9)
○途中に読点を入れて鐘をつく間隔を表したもの
・「ゴーン、ゴーン」(2)
・「ゴーン、ゴーン、ゴーン」(2)
○「アタリ」の後の余韻を表したもの
・「ゴオーン」
○夢の中で鳴っている音
・「ゴォォーン。ゴォォーン」
○途中の「オ」が徐々に小さくなっていくもの
・「ゴオォォォンゴオォォォン」(実際の作文の書き方では、「オ」が徐々に小さな字で書き表している)
○鐘の音の「うなり」を強調したもの
・「ゴ〜〜〜〜〜ン」
・「ボーンボーン」
・「ぼう〜〜ん」
・ふるえるように「ぼ〜んぼ〜ん」
・懐かしい音として「ドーン」。
・「ウォーン」

四年生では、余韻を強調する書き方が目立った。
・「ゴーンゴーン」(2)
・「ゴオーン」
・「ゴ――――ン、ゴ――――ン」
・「ゴーン…」と40回繰り返して書き、最後は「終」で終わる文
・「ゴーン」を13回書いた文
・「ゴ〜ン」を4回書き、最後に「ゴ〜〜〜〜〜〜〜〜ン」で終わる文
・「ボーン」(3)
・「ボーンボーン」(2)
・「ボーン」を6回繰り返して、「ボーンボーンボーンボーンボーンボーン」
・「ボーン、ボーン、ボーン」
・「ボーン、ボーン、ボーン、ボーン、ボーン」
・「ボーン」を23回繰り返した文
・「ボーン」を27回繰り返し文
・「ボーン…」を13回繰り返した文
・「ボーン…」を14回繰り返した後、最後は「ボーン…」で終わる文
・「ボォーン。ボォーン」
・「ボーウォーン」
・最初は「ボーン」で始まり、「ヴォーン」で終わる文
・「ボ――――ン…。ボ――――ン…。」

五年生では、
・「ゴーン」(4)
・「ゴーン、ゴーン」(4)
・「ゴーン、ゴーン、ゴーン」
・「(ゆっくりと低い音で)ゴ〜〜〜〜〜〜〜〜ン　×2(かける2)」
・「ゴーン」という音を、(深い何かに引きずりこまれるように)2回、次に5回、次に8回、最後に(鐘の音だけが聞こえる所へ深く深く)10回使った文
・「ボーン」
・「ボーンボーン」
・「ボーン、ボーン」

　以上のように、学年による差異はあまり見られなかったものの、学年が上がるにつれて、余韻を意識する傾向にあることは見てとれそうである。
　次に、鐘の音によって引き起こされた感性や感情が、どのように言葉や文に表されているかを見てみたい。

7. 鐘の音によって引き起こされた感性や感情に関わる言葉や文

二年生では、

- 「ねむくなる」(2)
- 「心にひびく」
- 「心が休まる」
- 「心がおちつく」
- 「たのしくなる」
- 「せつなくなる」
- 「なみだが出てくる」
- 「日本人の心をなごませる」
- 「おだやかで深い長い音」
- 「すんでるかんじ」
- 「すばらしき音」
- 「深い、きれい→深く悲しそう」

三年生では、

- 「心がおちつく」(3)
- 「なつかしい」
- 「気持ちよくなる」
- 「安心する」
- 「心をなごませる」
- 「あきない」
- 「心になりひびく」
- 「元気になる」
- 「心や気分がいやされる」
- 「きれいな音色」(5)
- 「ねがいごとがかなう」
- 「堂々としている」
- 「おいのりをした」
- 「頭がキーンとなる」
- 「気持がたかぶる」
- 「悲しそう」
- 「手を合わせ、目をとじる→心にしみこむ」
- 「私の心がさびしくなっていく→やさしい気持ちになってさびしい(良い意味の)」
- 「しんみり→じーん→心にしみる」「私にだけきこえる神様のうた(ちょっと自まん)」

四年生では、

- 「おちつく」(2)
- 「きれい」(2)
- 「いやされる」
- 「とても静か」
- 「静けさ」
- 「全身にひびく」
- 「とてもふしぎな音」(3)
- 「不思ぎなふんいき」
- 「夢の中にいるよう」
- 「心の奥深くに残るふしぎな音」
- 「見ていなくてもきこえる」
- 「最後にボーン→家中にひびく→少しの間のこる」

五年生では、

- 「きもちいい」
- 「ねむくなる」
- 「安らげる音」
- 「心にしみる、心にのこる」
- 「さびしい」
- 「なごむ」
- 「ゆったりしてくる」
- 「幸せな時間が長くなる」
- 「夢の中できいた」
- 「よみがえり」
- 「静かでおちついたぼんやりした風景」
- 「明日から今までとはちがう気分(になれる)」
- 「ジーンと心にきた→あたたかい音→なつかしいやさしい音」
- 「心にひびく→腹をわられる(音)→すっきりする→ストレス解消→無常になる」

以上、鐘の音によって起こされた感性や感情を並べてみたのであるが、表現の差はあっても、内容としては学年ごとに大きな差は見られなかった。どの学年でも、「おちつく」「心が休まる」「なつかしい」「やさしい」「気持ちよくなる」「ねむくなる」「とても静か」「あたたかい」「安心する」「ゆったりとしてくる」「なごませる」「楽しくなる」「心になり

ひびく」「いやされる」「心にしみこむ」等といった心の安らぎや癒しに関する感情が大半を占めていた。

また、「気持がたかぶる」「悲しくなる」「さびしくなる」「しんみりとする」「せつなくなる」といった興奮や哀感を表す言葉もあり、小学生の感情面でのイマジネーションも、既に我々大人と同じ日本人としてのイマジネーションが形作られていると思わせられる。このことは、決して「当たり前」のことではなく、小さな時分から培われた日本人としての根元的で、潜在的なイマジネーションと関わっていると思われる。

その他、どの学年でも鐘の音を聞いて、「うるさい」とか「気にさわる」といった言葉はほとんど見られなかった（もっとも、「頭がいたくなる」というのがあったが）。つまり全体的に、サウンドスケープの田中直子氏が指摘しておられるように、一音そのものの中に複雑性を見出し、感じ、「心地よさ」を感じ取っていると言えるのではないだろうか。

次に、鐘の音のイマジネーションを、子どもたちは実際にどのように書いているのか見てみよう。

8. 鐘の音のイマジネーションを表した作文

(1) 鐘の音と「夢」との関わり

二年　女子　かねの音を聞いていると

今日も、かねの音がなった。ゴーンゴーンゴーンわたしはこの音を聞いていると、なんだかせつなくなる。なぜならば、おじいちゃんがなくなったとき、聞いた音だからだ。

ある日、わたしはおばかへいった。わたしはすごくすごくかなしくなった。やっぱりそこではわらえない。わたしは、こんなにかなしくなるなら、ここにこなければいいと思った。わたしは家にかえった。そして、よるごはんを食べて自分のへやに入った。そして、わたしはこう思った。おじいちゃんのゆめを見れたらいいなと。でもやっぱり見れなかった。それで何日かたったある日の夜に、おじいちゃんのゆめを見た。おじいちゃんはやさしくわたしと遊んでくれました。（ゆめの中）朝おきて、わたしはこう思った。またそのゆめを見れたらいいな……と。

四年　女子　鐘の音

最初の鐘が鳴り、次の鐘が鳴る。とても静かだった。皆一言も、口に出さず、しんけんに聞いていた。私は何となく気持ちがおちついた。きれいな鐘の音でした。鐘の音が教室中にひびいていて、私の席は後ろだけれどよく聞こえた。あの鐘は、除夜の鐘だったのか……。何回鳴ったかわからない。そんなことは、別にどうでもいいけど、なにか気になる。不思議な気持ちだった。

まるで夢の中にいるようで、私の頭の中で思い出の一場面一場面が飛びかった。鐘の音一つなるごとに、思い出を一つ思い出す。陸上大会で金メダルの事、校外授業の事、家族旅行。みんな私の思い出。

五年　女子　鐘の音を聞いて

僕はコロ。テストでは名前を書くのを忘れて0点になる。自称ボケコロだ。僕が学校の帰りに歩いていると、

「ゴーン、ゴーン」

と鐘の音が聞こえた。そしたら、頭がぐらっとして、その場に倒れてしまった。目が覚めると、大きな鐘の前にいた。向こうに小さな村があり、いつもとは全然違う。僕は違う世界に来てしまったんだと思った。僕はまず、村で話を聞くことにした。村に着いた。通りがかった人に言った。

「ぼくはコロっていって、別の世界から来たんですけど、帰る道をしりませんか？」

「ああ、そしたら向こうの大きな鐘を鳴らせばいいんだよ。」
僕は急いで鐘の方に向かった。鐘があった。鐘をついた。しかし、鐘はならない。何度やっても同じだった。途方に暮れていた。すると、
「ゴーン、ゴーン」
鐘が鳴った。鳴り終わると衝撃が来て、飛ばされてしまった。と、そこに黒い穴があった。その中に入ってしまった。はっと目が覚めた。そこは布団の中だった。何が起こったのかわからなかった。お母さんに話を聞いた。
「あんた1週間も寝ていたのよ。」
その後は、何も起きなかった。

(2) 音の響き方に関するもの

二年　男子　鐘

鐘の音を聞いていると、おだやかで深い長い音が聞こえる。一度も鐘の音を聞いたことがありませんが、想像力を働かせると、現実ともものすごく近くまで想像することができます。しかし、一度も鐘を見たことがありませんので、現実まではいきません。しかし、想像力を働かせれば、現実までたどりつくことができます。

二年　男子　鐘の音をきいていて

お寺に行って鐘のおとを聞くと、ぼやーとして、なみだがでてくる時があります。なみだがでると、とまらなくなる時もありますが、とまらなくなる方が少ないです。さいきんは、鐘の音を聞いても、なみだはでませんが、まえは、なみだがでます。なぜなみだがでるかというと、きれいないい音だからです。かねは、時間をしらせる時もつかわれています。

二年　女子　お寺の鐘

七五三さんできものをきて、お寺で鐘をならしておいのりをします。お寺の鐘を聞くと、心が休まります。きれいな音だと思います。年に二、三度しかきけないので、聞いた時はとてもうれしく思います。

三年　男子　鐘の音を聞いていると

ゴーンゴーンと鐘が鳴っている。お寺から遠いところまでひびいてぼくはとおい場所にいた。ぼくの耳にもひびいてくる。でもどんどん音が小さくなっていく。鐘がなり終わりそう。でも鐘はもうなり終わってしまった。もうちょっとお寺に近ければよかったとぼくは考えました。

三年　男子　鐘の音を聞いていると

ゴーンゴーンお寺の鐘がなっている。遠くのほうからきれいに聞こえてくる。だれがならしているのだろう。林のむこうから聞こえてくる。でもお寺の鐘の音は心をなごませる。カラスがカァカァないている。夕方のお寺でないている。ゴーンゴーンカァカァ。いったいいつまでなっているのか。もみじもまっか、おなかもすいた。うちにかえってごはんにしよう。

鐘のひみつ（続きの作文）

鐘の音は、どうしてあんなにきれいなんだろう。ひみつがあるのだろう。行ってみよう。林をこえてかいだんのぼって鐘をみた。でもさくがあって入れないチェッ。そして帰りに考えた。きっと中にきれいな音が出るのどがあって、時間になると歌うのさ。人なんてならしてないのさ。ゴーンゴーン、きっとね。

三年　女子　鐘の音を聞いていると

ゴーンと鐘がなった。聞いていると思い出が思い出された。鐘の音を聞いていた私は、手を合わせ、目をとじた。目をとじると、鐘の音が心にしみこんだような感じがした。私は、きっと他の人も合わせているんだなと思って、ちょっとうす目をした。でも他の人はいなかった。

しばらく手を合わせていると、なんとなく気が重くなってきた。私はその場をはなれた。

三年　男子　鐘の音を聞いていると

鐘の音が聞こえた。寺じゅうがこの音につつまれ、ひびき渡った。この音によって皆は時間を知る。音はしだいにかすかになっていく。そして音は消え去る。

三年　男子　鐘の音を聞いていると

ゴオオオオンゴオオオオン。中野区新井やくし神社の鐘がなった。僕はまい年この鐘を聞いている。だがこの鐘の音はぜんぜんあきない。なぜならとてもいい音だからだ。

三年　男子　鐘の音を聞いていると

ゴオオオオオンゴオオオオオオオンゴオオオオンゴオオオオオン

これは、京都にある風間寺の鐘の音。

四年　女子　鐘の音

すぐそばで聞こえるのは鐘の音。見てなくても見てるように、一つ一つの鐘をおす人が目に見える。

人の話し声も自動車の音も聞こえない。ただ鐘の音だけが聞こえる。よく聞けば、いろんな音に聞こえてくる。

ボーンボーンボーンボーンボーン。ずーっと聞いていると、耳なりのようになるけれど、ずっと聞いていたくなる。ずーっと聞いていると、心がなんだかいやされる。

四年　男子　かね

ゴーン…終　（計四十回）

四年　男子　鐘の音

聞こえるのは、ただ、ボーンボーンという音だけ。かなりひびいている。ちょうど、大きな鐘を力いっぱいたたいているような音だ。よく聞くと、カーンカーンという音にも聞こえる。感じからすると、夜のようなふんいきだ。静かな夜に、鐘が鳴っているようなじょうきょうに思える。現代で言うと、福井県の日本海側のようなイメージだ。とにかく人口が少ないところで鐘が鳴っている。

まとめてみると、何個かの印象がある。第一印象は、やはり静けさだ。まあ他にもあるが、代表的なのは、やはりこれだろう。

五年　男子　ゴ〜〜ン

かき食えば　鐘がなるなり

ほうりゅう寺

鐘の音は、心にしみると言うか、心に残ると言うか…。

なにか、考えているとき、鐘の音がすると、その考えていることといっしょに、鐘の音が心にひびく。

鐘の音を聞くと、なんだかさびしい気がする。

ゆっくり、ゴ〜〜〜〜〜〜ン　×2

というふうに、ゆ〜〜っくり音がする。音もひく〜い。かなしいかんじ。

１年のおわり。１０８回。おわったなってかんじで、やっぱりさみしい。鐘の音で、この世にいない母（ぼくはまだ子どもだから、そんな人いないけど）を思い出したりする。

鐘の音を聞いていると……

五年　女子

ずっと聞いていると何が思い浮かぶか

鐘の音をずーっと聞いていると、いろんなことが思い浮かんでくる。それは、静かでおちついているぼんやりとした風景を、私を思い浮かべる。なぜかと言うと、鐘が鳴っている間の「ゴーン」という音が、その場面の一面に響きわたり、その場面にいる人の一人一人の心の中にも響きわたっている。その心の中で「ゴーン」と響きわたる鐘の音が何を指し示しているのかいつも考えている。私が思った結果によると、じょやの鐘の音の場合、今まで一生けん命に働いてきた又は勉強をしてきた人たちに、1年間の終わり・初めと言うまとめで、最後におちついて1年間の終わり・初めを送る又は迎えてほしいという意味で鳴っているのだと思う。

同じような意味で風鈴がある。この風鈴は、じょ夜の鐘の夏バージョンみたいなもので、夏の暑さに負けないで、夏という季節を良い意味でも知ってほしいと思って、鐘のやすらぎの音が聞こえる風鈴を作ったのだと思う。鐘の音と言うのは、最終的にただ鳴るのではなくて、人がやすらげる音でもあると思う。

五年　女子　鐘の音を聞いていると

鐘の音を聞いていると、なんだか自分の気持ちがゆったりしてくる。とても幸せな時間が長くなったような気がする。

じょ夜の鐘を聞くと、明日から今までとは違う気分で過ごすようだ。

結婚式の時の鐘も、幸せを祝うために鐘を鳴らす。

鐘は、新しいことを祝う時に鳴らすのだろうか？

(3)「自分だけの」鐘の音

三年　女子　神様の歌

ゴォーン……ひびいていると心がやすらかになる。「きれいな音だなぁ…」耳をすますとかすかに聞こえる。神様が天で歌っているみたいに聞こえる。私にだけに聞こえる神様の歌。きっと神様が「集合！さあ歌って！」というあいずなのかな？鐘の音がなくなると神様の歌も終わってしまう。もしだれか聞いていたら、私と同じ歌が聞こえるのかな？それともほかの歌に変わるのかな？ほかの人の聞いてる歌も聞いてみたいけど：やっぱり自分たった一人だけしか聞いてない歌を聞いている。ヤッパリそこはちょっと自まんかな？

三年　女子

自分だけにしか持っていない心の鐘

私の心の鐘を聞いてみたら、コーンとひびく音が聞こえてきた。その鐘は、さびしそうに聞こえてくる。それは、私の心がさびしくなっているのかな？。それをずっときいていると、やさしい気持ちになってきたきがする。その鐘は私にしか聞こえない。もっていない。それにお寺にある鐘も、この音はぜったいにだせない。だから、その鐘の音はだいじに持っていたほうがいい。

ぜったいにね。

(4) 縁起話を構成するイマジネーション

二年　男子　鐘

あの鐘をならしてみんなをおこそう。

あの鐘をならしてかねをこわそう。

古い鐘をたたくとこわれる。

ある日男の子がお寺の前をとおりました。その子はお寺の鐘をたたきたくなりました。もうがまんができなくなって、そっとお寺に入り、鐘をならしたら、いきなりガチャガチャという音がして鐘がこわれました。たいへんだとおもってにげようとしたら、お寺のおしょうさんが鐘をならしに来ました。男の子はたいへんだとおもって、こわれた鐘の中にもぐりこみました。

おしょうさんは、鐘つき場に行くと、鐘がこわれていました。おしょうさんはかんかんにおこって、鐘のかけらをどかすと、男の子がいました。するとおしょうさんは、男の子をつまみ出し、となりのじんじゃまでとばしました。

それからじんじゃの鐘に頭をぶつけると、「ゴーンゴーン」と鐘がなりました。

(5) 鐘の音のイマジネーションから詩を作る

二年　男子　鐘の詩

おてらの鐘はゴーンゴン
がっこうの鐘はキーンコーンカーン
キンカンキンカンたべたいな。

キンキンキン　小さな小さなかねの音
キリキリキリねじをまわしてキーリキリ
キリンの首は長いよね。

母さんがしんでしまったかなしいな。
ちーんちーんいのります。
今日も元気でありますように。

すべては鐘の音。

(6) 鐘の音と戦争

三年　女子　戦争の思い出

『私の名前は小林雪子。雪子と呼んでね。』

私の父は戦死したので、この世にはもういない。夫は、お寺の鐘を打つために、毎日お寺に来ていての。夫のついた鐘の音は、とってもきれいな音色だったの。今の他人がついている鐘の音を聞くと、笑顔で笑っている夫の事を思い出すの。昔の戦争の話、聞いてみる？

昭和20年8月6日

『ズドーン、バリーン、ギャ～助けて～。』

広島に悲げきの爆弾がおちた。たいほうの音や苦しまぎれに助けられるのを待つ人の声……

皆、次々にバタバタとたおれていく。

夫も1年後には白血病で死んだ。夫は、死ぬ前に、お寺に行って、悲しみの日々をつたえようと、あのきれいな音色の鐘の音をきずついた人に聞かせた。私は、夫の優しさにつられて、涙をポロポロと流した。私は、その思い出は絶対に忘れられない悲しい思い出だ。

忘れられない思い出、戦争の悲しい思い出、むねがいっぱいになる思い出、

『ゴーンゴーン。』

『あら、鐘の音ね。きれいだね。夫が帰ってくるといいなあ。』

五年　女子　鐘の音を聞いて

これは、私がこの話の語り手になったつもりで書いていて、自分の感情も入っている。

鐘の音を聞いた時、私は小さい頃を思い出す。忘れられないあの日の事を……

その時私はまだ7歳で、戦争が終わる五年前だった。当時の国民の暮らしはひどいもので、配給きっぷで、毎日の食べ物を買うのがやっとぐらいだ。

でもその中では、まぁ金持ちの方で、広島に、父、母、弟の4人家族で住んでいた。

ある日、私は初めて5歳の弟とお寺に行くことになった。鐘つき堂の前の階段まで歩いた時、何か新鮮な感じがした。なぜなら、お寺に来る人はほとんどえらそうな人ばかりだったからだ。

こうふんをおさえながら、階段を上り、弟と顔を見合わせた。

『ねぇ、姉さん、何をすればいいの？』

『そんな事言われても、あ、この鐘を鳴らして願いをするんじゃない。そうなの、父さん』。

後ろでうなずく父を見た後、弟と2人で

綱をひっぱり、大きな音を鳴らした。
『ボーーーーン。』
その音を聞きながら、みんなが長生きできますように、そう願った。辺りにひびきわたった音が心に残った。
帰りがけに、
『また来年、えぇと、1941年8月6日にここに来ようね。』
二人で笑いながら指切りげんまんした。今も指切りを思い出すと、指が熱くなる。そして約束通り、次の年も、その次の年も、そのまた次の年も、そのまた次の年も鐘を鳴らしに8月6日に来た。
そして1945年、もうお寺に行けそうもなかった。2か月ぐらい前からサイレンが鳴り、何十回も穴の中に入った。12歳の私は、大人の手伝いをしなければならなくて、とても遊ぶどころではなかったため、親にどこかへ行きたいとは言わなかった。けれど、お寺だけはどうしても行きたかった。
『母さん、お願い。弟と一緒にお寺に行かせて。』
『ダメです。いつばくだんが落とされるか分からないでしょう。』
いったん母は顔をこわくしたが、すぐやさしい顔になり、
『いいわよ。行ってらっしゃい。』
とそれだけ言い残すと、台所に行った。
私は弟にそのことを話して、お寺に向かう。そして階段を上ろうとした時、サイレンが鳴りひびく。
『どうしよう。たか。カネ鳴らすの?』
『うん』
私たちは決心し、綱をひっぱりならした。聞こえない。どうしたのだろう。
『大変だ。』
『父さぁん』
『どこにいるの。』
色々な声が聞こえてくる。その中で、とぎれとぎれ鐘の音が聞こえる。
弟の手をひっぱり、私はすぐかけ出した。倒れている人がたくさんいる。我が家は、
『ない、家がない。』
弟は泣き出し、私は立ちつくした。
今思うと、生きている事が幸運なのだが、まだ弟と8月6日にお参りにお寺に行っている。
悲しそうにひびく音。それは昔を思い出す音。みんなの心にも音がひびくだろうか。

8. おわりに

古来、日本人は、鐘の「オト」を鐘の「ね」といい、虫の出す「オト」を虫の「ね」と言い慣わしてきた。また、うわべではなく、心の奥底にあるものを「本音（ほんね）」と言い、心の底で恨み辛みを抱くことを「ねに持つ」と言ってきた。
更に、「あいつは、ねっからいいやつだ。」といって、良い時に使う場合もあるし、話し合う前に「根回しをする」などと何やら胡散臭さを思わせる場合にも使っている。
このように考えてくると、日本人が「ね」に感じる感覚は、地下の奥深いところ、未だ本質が表れない部分を表し、そこからものごとの本質みたいなものを感じ取ってきたのではなかろうか。
それは何も大人に限ったことではなく、小学生の子どもであっても、教師が「鐘の音」と黒板に書いて「かねのね」と読んでも、ほとんど違和感なく受け入れることからも分かる。前出の小倉朗氏の言われるように、日本の耳は人間的な感情を移入して聞く耳、というばかりでなく、そこに、根元的で潜在的なイマジネーションを持っているからこそ、それが子どもたちの作文に如実に表れているといえよう。子どもたちは、「オト」と「ね」をどこかで使い分け、「ね」から次々と湧き出るイマジネーションを展開させていった。子どもたちが作文を書いている時は、静かで没入しているかのようであったと、幾人かの作文に書かれていた。

これほどまでに、日本人の心の裡に潜み続ける「鐘の音」は、これからも子どもたちの裡に生き続けるに違いないと思う。

最後に、明治から昭和にかけて文壇に大きな足跡を残した、永井荷風の鐘の音にまつわる随想を紹介したい。昭和十一年、荷風が五十七才頃の文章である。

『鐘の声』　　**永井荷風**

住みふるした麻布の家の二階には、どうかすると、鐘の声の聞えてくることがある。

鐘の声は遠過ぎもせず、また近すぎもしない。何か物を考えている時でもそのために妨げ乱されるようなことはない。そのまま考に沈みながら、静に聴いていられる音色である。また何事をも考えず、つかれてぼんやりしている時には、それがためになお更ぼんやり、夢でも見ているような心持になる。西洋の詩にいう揺籃の歌のような、心持のいい柔な響である。

わたくしは響のわたって来る方向から推測して芝山内の鐘だときめている。

むかし芝の鐘は切通しにあったそうであるが、今はその処には見えない。今の鐘は増上寺の境内の、どの辺から撞き出されるのか。わたくしはこれを知らない。

わたくしは今の家にはもう二十年近く住んでいる。始めて引越して来たころには、近処の崖下には、茅葺屋根の家が残っていて、昼中もにわとりが鳴いていたほどであったから、鐘の音も今日よりは、もっと度々聞えていたはずである。しかしいくら思返して見ても、その時分鐘の音に耳をすませて、物思いに耽ったような記憶がない。十年前には鐘の音に耳を澄ますほど、老込でしまわなかった故でもあろう。

然るに震災（註　1923年44歳）の後、いつからともなく鐘の音は、むかし覚えたことのない響を伝えて来るようになった。昨日聞いた時のように、今日もまた聞きたいものと、それとなく心待ちに待ちかまえるような事さえあるようになって来たのである。

鐘は昼夜を問わず、時の来たるごとに撞きだされるのは言うまでもない。しかし車の響、風の音、人の声、ラヂオ、飛行機、蓄音器、さまざまの物音に遮られて、滅多にわたくしの耳には達しない。

わたくしの家は崖の上に立っている。裏窓から西北の方に山王と氷川の森が見えるので、冬のうち西北の富士おろしが吹きつづくと、崖の竹藪や庭の樹が物すごく騒ぎ立てる。窓の戸のみならず家屋を揺り動かすこともある。季節と共に風の向も変って、春から夏になると、隣近処の家の戸や窓があけ放されるので、東南から吹いて来る風につれ、四方に湧起るラヂオの響は、朝早くから夜も初更に至る頃まで、わたくしの家を包囲する。これがために鐘の声は一時全く忘れられてしまったようになるが、する中に、また突然何かの拍子にわたくしを驚すのである。

この年月の経験で、鐘の声が最もわたくしを喜ばすのは、二、三日荒れに荒れた木枯しが、短い冬の日のあわただしく暮れると共に、ぱったり吹きやんで、寒い夜が一層寒く、一層静になったように思われる時、つけたばかりの燈火の下に、独り夕餉の箸を取上げる途端、コーンとはっきり最初の一撞が耳元にきこえてくる時である。驚いて箸を持ったまま、思わず音のする彼方を見返ると、底びかりのする神秘な夜の空に、宵の明星のかげが、たった一ツさびし気に浮いているのが見える。枯れた樹の梢に三日月のかかっているのを見ることもある。

やがて日の長くなることが、やや際立って知られる暮れがた。昼は既に尽きながら、まだ夜にはなりきらない頃、読むことにも書くことにも倦み果てて、これから燈火のつく夜になっても、何をしようという目当も楽しみもないというような時、ふと耳にする鐘の音は、机に頬杖をつく肱の

しびれにさえ心付かぬほど、埒もないむかしの思出に人をいざなうことがある。死んだ友達の遺著など、あわてて取出し、夜のふけわたるまで読み耽けるのも、こんな時である。

若葉の茂りに庭のみならず、家の窓もまた薄暗く、殊に糠雨の雫が葉末から音もなく滴る昼過ぎ。いつもより一層遠く柔に聞えて来る鐘の声は、鈴木春信の古き版画の色と線とから感じられるような、疲労と倦怠とを思わせるが、これに反して秋も末近く、一宵ごとにその力を増すような西風に、とぎれて聞える鐘の声は屈原が『楚辞』にもたとえたい。

昭和七年の夏よりこの方、世のありさまの変るにつれて、鐘の声もまたわたくしには明治の世にはおぼえた事のない響を伝えるようになった。それは忍辱と諦悟の道を説く静なささやきである。

西行も、芭蕉も、ピエール・ロチも、ラフカヂオ・ハアンも、おのおのその生涯の或時代において、この響、この声、この囁に、深く心を澄まし耳を傾けた。しかし歴史はいまだかつて、如何なる人の伝記についても、殷々たる鐘の声が奮闘勇躍の気勢を揚げさせたことを説いていない。時勢の変転して行く不可解の力は、天変地妖の力にも優っている。仏教の形式と、仏僧の生活とは既に変じて、芭蕉やハアン等が仏寺の鐘を聴いた時の如くではない。僧が夜半に起きて鐘をつく習慣さえ、いつまで昔のままにつづくものであろう。

たまたま鐘の声を耳にする時、わたくしは何の理由もなく、むかしの人々と同じような心持で、鐘の声を聴く最後の一人ではないかというような心細い気がしてならない……。

荷風はこの随想の中で、以前には鐘の音に耳をすませて、物思いに耽ったような記憶がないのに、関東大震災を経験した後には、鐘の音は「むかし覚えたことのない響きを伝えてくる」ようになった。そして、「執筆や読書に倦み疲れた時、ふと耳にする鐘の音は埒もないむかしの思い出に人をいざない、死んだ友達の遺著などをあわてて取出し、夜のふけわたるまで読み耽け」たりもする。と書いている。大震災の前には、鐘の音は外から伝わってくる響きであり、それによってことさら裡なるイマジネーションを触発させるまでには至ることはなかった。それが大震災を経験することを通して、鐘の音と裡なる心境の変化が重なりあい、特にあの世と関わる潜在意識が頭をもたげてきたに違いない。荷風は最後に、「たまたま鐘の声を耳にする時、わたくしは何の理由もなく、むかしの人々と同じような心持で、鐘の声を聴く最後の一人ではないかというような心細い気がしてならない……。」と書いているが、荷風がこの随筆を書いた昭和十一年でさえ、鐘の音と日本人の心情とが乖離しつつあることを危惧している。また戦時中の金属の供出によってかなりの数の梵鐘が失われ、更に戦後、科学技術による時勢の変化の中で、ますます実際に鐘の音を聞く機会が失われつつあるのが実態である。

しかし、これまで子どもたちの作文に見たように、現代の子どもであっても、日本人としての根元的で潜在的な鐘の音のイマジネーションが全く失われたとは思えないし、これからも生き続けていくに違いないと思うのである。

なお、今回引用した聖徳学園小学校の子どもたちの作文は、今から十五年ほど前に書かれたものであるが、資料性は今もって色褪せていないように思われるのである。また、今回一年生と六年生は資料を得ることができなかったが、作文例の数は次のとおりである。

二年生　二十四名
三年生　四十六名
四年生　三十名
五年生　十七名
合計　一一七名

（元玉川学園小学部教諭）